

春樹の遺言

桜の下で、震えてはいたが、この手で書いた。

甥の健二へ

この手紙がおまえに届くころには、蟬の声も静まり、わたしはようやく最後のセットを組み上げているだろう。あまり長く悲しむな。わたしは満ち足りた人生を生きた。その充実の多くは、暗い作業場で踏むと悪魔のように痛い、小さなプラスチックの部品としてやってきた。おまえだけだった。家族の他の者が客間で茶を飲み金の話をしている間、おまえはわたしと一緒に、ケースに囲まれた畳の上に座り、部品の値段を一度も尋ねなかった。おまえはわかっていた。わたしがわかっていたように、値段と価値は同じものではないと。

わたしが遺すもの、そしてその相手を記す。

おまえの父、わたしの弟には釣り竿を遺す。理由は彼が知っている。そして彼は決して使わないだろう。隣人たちへ、真夜中すぎの物音を詫びる。あれは風ではなかった。そして健二、おまえには、そのすべてを遺す。ケースのひとつひとつ、引き出しのひとつひとつ、作業台の上の棚にある作りかけのすべて。コレクションだ。丸ごと。もうおまえのものだ。ただしひとつだけ条件がある。この部分は二度読んでほしい。

このブロックたちに、ふさわしい愛を注いでやってくれ。

誰も祈らない祠のように、ガラスの向こうに大事にしまっておけという意味ではない。組み立てるという意味だ。わたしのモデルをばらして、わたしが夢にも思わなかった何かに変えてくれ。床板の下に部品をなくして、きちんと悼んでやれ。正しいブロックが正しい場所に収まり、あの小さな完璧なカチッという音を聞いたとき、わたしがあの作業台で一万回感じたものを感じてほしい。

そして何があっても、色で仕分けてはいけない。

色で並べるのは、組み立てない人間のやり方だ。写真では整って見えるが、小さな部品がひとつ必要なときに赤いものしか見つからなければ、何の役にも立たない。形で分ける。その部品が何になれるかで分ける。できるなら、愛で分ける。だが健二、決して、決して色では分けるな。このひとつの条件を守れば、コレクションは本当におまえのものになる。プラスチックだけではなく、その裏にある理由のすべてが。

さあ、行って何かを作れ。わたしは桜の下から見ている。おまえの部品の整理について、きつとぶつぶつ言いながら。

愛をこめて

春樹おじさん